

教師の認知した高校生の行動の不健康性

長谷川博一

問 題

教師は高校生徒の教育上配慮が問われる日常的な種々の行動に対して、不健康性あるいは問題性の認知をいかなる枠組みによって形成しているであろうか。

高校生はライフサイクル上青年期に位置づけられる。この青年期の特殊性について、これまでに多くの研究者（例えば、Lewin, 1951; Ausubel, 1954; Erikson, 1959）によって、それ以前の少年期までとは異質な自己を再構成していかなねばならない、困難に満ちた危機（crisis）的な時期であると論じられてきた。その過程で多くの青年が一時的な混乱を経験し、主観上の苦痛や行動の逸脱など多様な症状を呈しやすと考えられている。そしてそのような青年期の意識や行動上の問題に関して、それを軽減し予防していく展望をもって、生起要因を明らかにしようとする研究が数多く報告されてきた。生徒側の要因として刺激への過敏性、対人関係能力の乏しさ、ストレス耐性の低さ、コーピング能力の低さ（三浦他, 1996）などが認められている。そして最近の傾向としては、青年の個人的な要因と環境要因を互いに独立な存在と考えるのではなく、青年の側の環境に対する認知や時代社会による青年像の認知が影響し合っているとする、個人と環境の相互的にかかわり合いが青年の不適切行動を規定するという見方が、重要度を増しつつある。Wapner et al. (1973)

の人間環境相互交流論やLerner (1985) の力動的相互作用モデルなどの中にそれを見いだすことができよう。Brophy et al. (1974) は、それまでの教育研究が実践に有効な成果をもたらしてこなかった最大の理由として、一人ひとりの生徒と教師の相互作用研究の欠如をあげており、生徒の不適応は学校で教師からどのような扱いを受けたかによって説明できるところが多いとしている。

青年がある混乱状態を呈している時、そこには彼の家族、学校、地域、文化が一人の青年としての彼や一般青年をどのような価値で評価しようとしてきたか、そしてそれを青年自身がどのように受け止めているかが影響してくる。それにとどまらず、青年が逆に社会に対して形成した態度が社会的枠組みをも規定していくといった、力動的な影響関係が成立しており、全体のシステムの中で能動性を発揮している存在として考えていくことが必要である。たとえば、生徒の学級内での態度の個人差は、教師の関心に影響を与え、異なった反応を引き出す (Jackson, 1969) ことがかなり以前から指摘されていた。

本稿では、高校生徒の状態像に対して相互影響関係にある社会的変数の重要な一つとして、学校教師による青年の認知のあり方を取り上げて検討していく。教師の態度は生徒の適応や生徒との相互作用のあり方に強い影響力をもっている。実際に、生徒による教師からの非受容的態度の認知（教師関係のストレ

ス)が生徒の不適切反応を促進し(岡安他, 1992), 受容的態度の認知(教師からのソーシャル・サポート)が不適切反応を軽減する(岡安他, 1993)ことが確かめられている。また, 担任教師が生徒に肯定的評価をフィードバックすると生徒の自己評価は上昇し(樽木, 1992), 内的適応感を高めるとする報告もある。

ところで小泉(1992)は, Brown et al. (1982)やElias et al. (1985)などの調査報告を示しながら, 教師による生徒の状態に関する認知は生徒自身が実際にもつ内容と異なっていると整理している。わが国で実施された調査では, 浜名他(1983)が教師の勢力資源と影響, 吉田他(1987)が学習意欲に及ぼす影響, 坂西(1994)が利己的生徒の理解を取り上げて, それぞれ教師と生徒間で認知のズレが大きいことを示している。Brophy et al. (1974)は学級場面のフィールドスタディに関する報告を基にして, 生徒の行動に対する教師の認知と観察データの間の一貫性が低いこと, そして教師の認知は初頭効果に強く規定されており, かなりの安定性をもっていることを指摘している。

生徒の行動の問題性に関する認知の不一致についてはどうであろうか。Galloway(1985)は不登校の原因に関する認知のズレを指摘して, 教師がそれを親の責任とする傾向をもっていると述べている。白井(1992)は不登校児に対する青年と大人, 教師の認知の違いを検討し, 教師が不登校の原因として発達論を支持する割合が高いことを示している。また小川(1955; 1956; 1957)は, 教師が生徒の内攻的行動(引っ込み思案)よりも進攻的行動(学習活動を妨害する行動)に対して注目する傾向があることを, 一連の研究において述べている。伊藤(1994)は, 非行少年の規範意識と大人社会の法規範のずれを示して, 非行少年にとっては逸脱行為が必ずしも逸脱とは言い切れないとしている。生徒に対して大人の価値観を押しつけることが教育上の倫理から許されないことは言うに及ばないが,

相互作用の観点から, 生徒が自己概念を形成していく上で自己に関する情報を周囲の大人からのフィードバックとして能動的に受け取っており, 他者の認知が自己概念についての自己成就予言(self-fulfilling prophecy)となってしまう(Pope et al., 1988)ことにも配慮する必要があるだろう。

教師の生徒認知のあり方が, 生徒の側の認知と相互作用的な効果を発揮しながら生徒の心理状態に深くかかわってくると考える以上, 教師による生徒の健康性や問題性の認知様式を明らかにしていく必要性は高い。生徒の内側だけに問題一般は存在しない(Rogers, 1966; 山中, 1982)のであり, それを問題として取り上げる教師の側の姿勢を問わなければならない。教師が問題であり不健康であるとするまなざしを向けることによって, その生徒が問題生徒を担わされていくとする相対性において理解していくべきである。このような生徒を評価する大人社会の側の要因に注目する考え方は, 犯罪社会心理学史上よく知られているラベリング理論(Becker, 1963; 村上訳, 1978)において, 犯罪の裁定者の役割に重点が置かれた点と軌を一にしているともいえよう。特に日本の高校生は学校社会への準拠の要請度が強く, 不健康性や問題性の検討をしていく上で教師の認知のあり方を問う視点の意義が増してくると考えられる。本稿においては, 教師認知の対象である生徒行動について, “一般の高校生の日常性の中に観察可能で不健康性の考察が必要であると考えられる外的行動や内的状態”と実際的な定義づけをしていく。

教師の生徒認知に関する以下の2点を明らかにしていくことが本稿の目的である。(1)教師は高校生徒の行動の不健康性を, どのような枠組みにおいて認知しているか(認知の因子構造の分析)。(2)教師の認知した生徒行動の不健康性はどの程度であり, それに出現度の認知がかかわっているか(不健康因子に対する認知の不健康度と出現度の相関分析)。特に第1の目的において, 教育の専門家としての

教師の認知基準の特殊性を考察していく。

方 法

使用した高校生徒行動尺度

高校生徒の不健康性にかかわる行動を測定するために、長谷川（未公刊）が作成した大学生版日常的問題傾向尺度の項目を高校生用に修正して使用した。これは、高校生、大学生や教師の自由記述から収集した108の行動のリストに、問題性認知と経験による通過率の検討、因子分析、項目分析、3つの信頼性の検討を経て作成された尺度の30項目である（項目は、TABLE 1に因子分析結果とともに記載した）。本稿では、本来の目的である生徒行動の測定とは異なり、教師の認知構造測定のために使用した。

調査の対象と実施法

この尺度は、愛知県、岐阜県、高知県内の公立高校の現役教師98名に対して施行された。そのうち男性は50名、女性は48名で、平均年齢は37.4才であった。

30項目を配列して次のような教示を添えた調査票を、個別に配布して回収を行った。教示は、まず“高校生の行動について個人的な考えをたずねる”と前置きし、“①高校生がそのような行動や態度を呈するとしたら、精神的な健康度からみてどの程度健康だと思うか、②現実にそのような高校生はどの程度存在していると思うか”とした。また、“健康の判断は個人的基準で構わない”とつけ加えた。これら2通りの設問に対して、健康度は“低い：1”から“高い：5”，出現度は“少ない：1”から“多い：5”までのそれぞれ5段階で評定を求めた。調査は1996年9月から1997年2月にかけて実施された。

結 果

回答の集計

回収された調査票のうちすべての回答が有効であったものは、男性が36名で女性が44名の計80名であった。有効回答者率は81.6%で

ある。調査票で特に求めていなかったが評定に関するコメントが記された回答も含まれていたことなどから、全体として教師の評定姿勢の積極さが十分にうかがえた。30項目の回答は、5つの段階に依じて不健康度と出現度が高いほど高得点を意味するように1から5を与えて得点化した。

不健康性認知の因子分析

80名分の得点化したデータのうち、生徒行動に対する認知の不健康度得点を使用して因子分析を行った。主成分法によって因子の抽出を試みた結果、固有値が1以上の因子は7つであったが、第1因子から第7因子の固有値のスクリープロットは第6因子でやや大きく落ち込んでおり、第5因子までの累積寄与率が56.5%と比較的大きい水準にあった。したがって5因子構造であるとの解釈が可能であると判断し、引き続き因子数を5に指定して主成分法の因子抽出を行い、バリマックス回転を施した。その結果はTABLE 1に示されている。因子負荷量が.40以上の項目を、その因子を構成する項目であると判断し、以下のような因子の命名を行った。

第1因子は、“30. 学校で友達と話をしない”（項目内容は一部を省略して記載：以下同）に最も負荷が高く、続いて“29. 親が好きでない”，“2. 嫌いな授業にはでない”，“8. 物を粗末に扱う”，“7. 酒を飲む”，“24. 異性の友人がいない”，“6. ほとんど外出しない”などに負荷が高かった。すべての項目が、教師や親、友人など他者との社会的関係の回避や不良を表しており、“良好な対人関係の欠如”の因子とした。第2因子は、“19. 親や先生から注意を受ける”と“26. 親に口答えする”に対する負荷がもっとも高く、“25. 長電話をする”，“13. 性行為をする”，“11. 死んでしまいたいと思う”が続いている。他者との関係を維持する点では第1因子とは逆転しているが、その関係の質は大人への反抗や友人との長電話や性行為、他者の不理解を基礎とした自殺年慮であり、大人社会の価値にそぐわない対人関係のあり方を表

教師の認知した高校生の行動の不健康性

TABLE 1 教師の認知した高校生徒行動の不健康性の因子分析結果 (N=80)

No.	項目	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
1	繁華街へ出かけることがたびたびある。	.08	.05	.06	.22	-.59	.73
2	嫌いな授業(講義)には出ないことがある。	.68	.14	-.19	.04	-.01	.61
3	体調が悪くて学校を休むことが多い。	.30	.27	-.20	.59	.18	.63
4	いつも、いい成績を取らなければならないと気にしている。	.31	-.14	.15	.61	.00	.70
5	いつも、人に言えない悩みがある。	.21	.13	.04	.29	.64	.81
6	学校以外にはほとんど外出しない。	.54	.06	.38	.34	-.10	.59
7	よくお酒を飲む(酒種は問わない)。	.64	.31	-.05	-.05	-.13	.62
8	学校や店、路上にある物を壊すことがある。	.66	.31	.23	.22	-.14	.71
9	学校では保健室によく行く方である。	.50	.39	.40	.15	.02	.61
10	自分の部屋はいつもきれいに整頓している。	-.25	.01	-.56	.09	-.30	.50
11	死んでしまいたいという気持ちになることがある。	.31	.55	.24	-.01	.43	.66
12	特に趣味はない。	-.03	.16	.71	.07	-.05	.59
13	異性の友人と性行為をしたことがある(性行為は広くとらえる)。	.38	.63	-.12	.06	-.35	.71
14	嫌いな先生には反抗的である。	.51	.35	.33	-.14	-.23	.66
15	どちらかという病気がちである。	.22	.33	.37	.33	.20	.62
16	香水やデオドラント(臭い消し)を使用することがある。	.07	.51	.39	-.03	-.34	.68
17	自分の性格や容姿が好きではない。	-.15	.35	.46	.34	.35	.64
18	家では、テレビやビデオばかり見ている。	.17	.18	.63	.19	-.07	.55
19	時々、服装や髪型で親や先生から注意を受ける。	.16	.76	.27	-.03	.05	.69
20	カッと人にならぬことを言ったり暴力を振ることがある。	.48	.51	.31	.00	.05	.74
21	学校に行く前に腹痛や吐き気を起こすことがある。	.52	.26	.38	.37	-.03	.72
22	外出するときは親と一緒にいることが多い。	-.10	.07	.22	.56	-.10	.61
23	夜はなかなか眠れない。	.37	.51	.35	.08	.44	.74
24	好きな異性の友人がいない。	.56	.03	.30	-.16	.18	.53
25	長電話をすることが多い。	.16	.73	.12	.05	.08	.63
26	時々、親に口答えをしたりうそをつく。	.22	.76	.08	.19	.06	.69
27	自分の身体のことを考えることが多い。	-.12	.43	-.32	.39	.09	.56
28	家(下宿)では勉強に関することをしているのが多い。	-.47	-.01	-.01	.59	-.07	.65
29	両親が好きでない。	.73	.14	.17	.01	.20	.68
30	学校で友達とあまり話をしない。	.76	.10	.17	.07	.24	.71
固有値		8.91	2.51	1.96	1.84	1.74	
寄与率(%)		29.7	8.4	6.5	6.1	5.8	

すために“逸脱した対人関係”と命名した。第3因子は、“12. 趣味はない”, “18. 家ではテレビばかり見ている”, “10. 部屋を整理し

ない(反転の修正済み)”などの負荷が高く、活動性の全般的な低下状態を表していることから“活動性の低下”とした。第4因子は、

“4. 成績を気にする”, “3. 体調が悪くて学校を休む”, “28. 家では勉強ばかりする”, “22. 外出は親と一緒にが多い”に負荷が高く, 親の期待への過度な同一視と強迫性, もしくはそこからの脱落にかかわる状態で, “期待への同一化過剰”とした。第5因子は, “5. 悩みがある”, “1. 遊びに出かけない (反転の修正済み)”, “23. 夜は眠れない”, “11. 死んでしまいたいと思う”に負荷が高いので, “主

観的苦痛”と命名した。

因子間相関係数を TABLE 2 に示したが, “期待への同一化過剰”を除く4因子は互いに関連性が高くなっている。また因子内の項目の内部一貫性は, Cronbackの α が第1因子で.883, 第2因子で.850, 第3因子で.687, 第4因子で.511, 第5因子で.634であり, 第4因子を除いて比較的高い水準にあった。

TABLE 2 教師の認知した不健康性の因子間相関係数

	2 逸脱した対人関係	3 活動性の低下	4 期待への同一化過剰	5 主観的苦痛
1 良好な対人関係の欠如	.674**	.574**	.089	.467**
2 逸脱した対人関係		.557**	.202	.560**
3 活動性の低下			.224*	.463**
4 期待への同一化過剰				.123

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

不健康性の認知

不健康性の認知の回答を因子ごとに反転を考慮して加算合成したものを項目数で除して, 1項目あたり不健康性認知得点とした。因子

別の不健康性認知得点を男女別にFIGURE 1 に示した。一元配置分散分析により5因子間で比較したところ, 差は有意であった ($F [4, 395] = 9.17, p < .01$) のでDuncanの多重

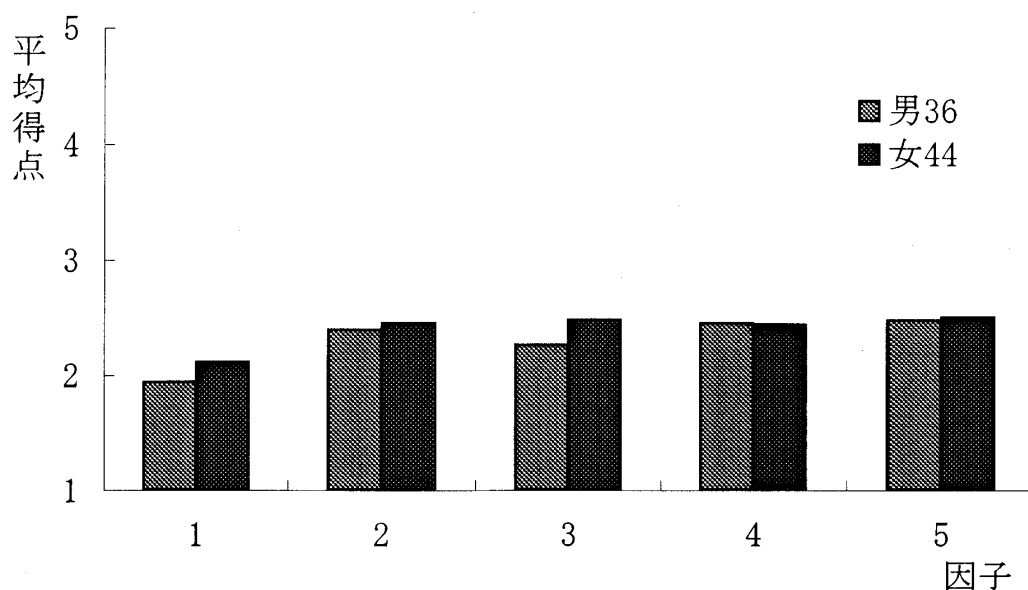


FIGURE 1 因子別の1項目あたり不健康性認知得点

範囲検定を行い、“対人関係の欠如”に対する得点が他の4つの因子に比べて高いことが明らかになった。次に性差を検定した結果、“良好な対人関係の欠如”因子で10%水準 ($t=1.43$, $df=78$, $p<.1$) の有意差の傾向、“活動性の低下”因子で5%水準 ($t=1.88$, $df=78$, $p<.05$) の有意差を認め、両因子とも女性教師の方が不健康性認知が高い傾向にあった。

出現度の認知

出現度の認知の回答を不健康性認知と同様に処理して、因子ごとに1項目あたり出現度

認知得点を算出した。因子別の出現度認知得点を男女別に FIGURE 2 に示した。一元配置分散分析の比較から5因子の間の差は有意であった ($F[4,395]=12.55$, $p<.01$) ので Duncanの多重範囲検定を行い、“活動性の低下”因子に対する得点が他の4つの得点に比べて低く、“逸脱した対人関係”が“良好な対人関係の欠如”と“期待への同一化過剰”に比べて低いことが明らかになった。次に性差を検定した結果、どの因子においても有意差が認められなかった。

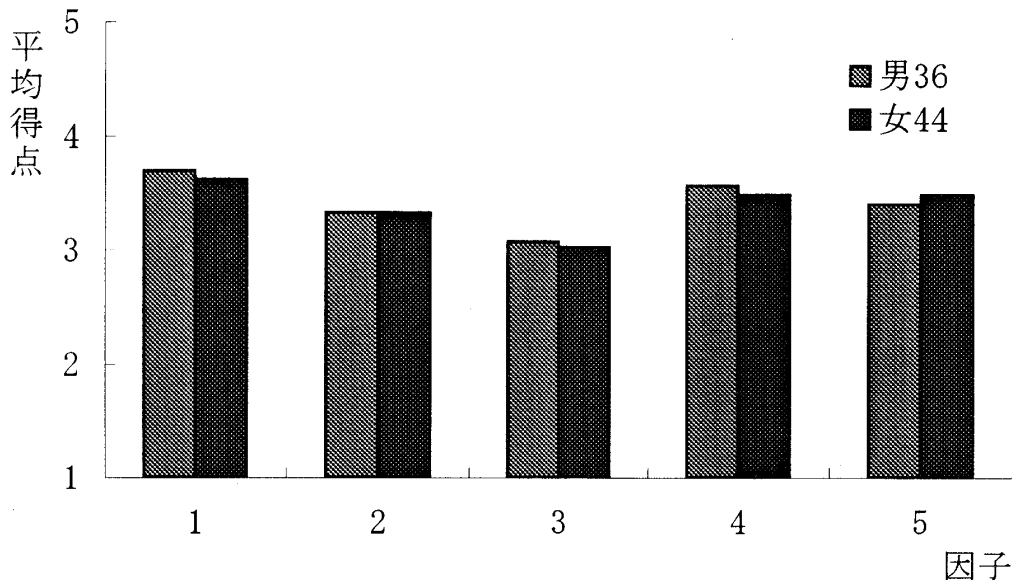


FIGURE 2 因子別の1項目あたり出現度認知得点

不健康性認知と出現度認知の関係

不健康性認知得点と出現度認知得点の間の相関係数 (pearson) を、因子ごとに算出した結果をTABLE 3 に示した。どの因子におい

ても有意な負の相関がみられ、教師は一般の高校生にはみられにくいと考えている行動の方が不健康だと認知する傾向にあることがわかる。

TABLE 3 教師の認知した不健康性と出現度の相関係数

1	2	3	4	5
良好な対人関係の欠如	逸脱した対人関係	活動性の低下	期待への同一化過剰	主観的苦痛
-.550**	-.537**	-.332**	-.353**	-.514**

** : $p < .01$

考 察

教師からみた高校生徒の日常性の中に観察される不健康性の認知は、因子分析の結果“良好な対人関係の欠如”，“逸脱した対人関係”，“活動性の低下”，“期待への同一性過剰”，“主観的苦痛”の、解釈性と統計的信頼性の高い5因子構造をもつことが示された（TABLE 1）。これは、教師が生徒の行動について不健康であるとの評価づけを行う際に、この5因子が意味するところを基準に行っている傾向があることを表している。

最初の2つの因子はいずれも生徒の対人関係にかかわる問題であるが、第1因子が良好な対人関係自体をもてないことを、第2因子がそれを維持する仕方を問題視していることを指している点で異なり、生徒の社会的関係形成の方向性が逆転するものである。前者に特徴的なのは、自我収縮的な対人接触回避と自我拡張的な反抗的かかわり形成の両面（清水，1985）を含んでおり、教師がこれらを同じ因子の中に認知していることであり、この点は興味深く感じられる。なぜなら、臨床所見上これらは対極にある状態として理解されるのが一般であり、生徒の行動に基づいたデータを用いて構造分析をした場合、両者は異なる因子に分離して見出されることが推測されるからである。たとえば長谷川（1990）の報告では、男女学生の行動を問う尺度の因子分析から、反抗的かかわりを表す“対抗”の因子が単独で抽出され、対人関係の回避に関しては活動の全般的低下と結びついて別の“無為”因子を構成していた。このように生徒の対人関係の健康性において、実際の生徒の行動の構造とそれに対する教師の認知構造

は大きく異なっている。

“良好な対人関係の欠如”と“逸脱した対人関係”の不健康性認知度を比較した場合、教師は後者の方をネガティブに捉えている（TABLE 2）ことがわかる。教師は生徒が人とうまくかかわれないことよりも、教師の抱えている理想的な対人関係のあり方を維持できないことに、より一層の問題性を感じている。教師の指導を遵守せず、友人と好ましくないつき合いをする生徒の行動は、教師にとって学校場面で観察が容易であろう。そしてそれは教師の指導上の直接的な障害要因となり、教師に困難さを経験させよう。これは、小川（1955；1956；1957）が生徒の進取的行動（学習活動を妨害する行動）に対して注目する傾向があると述べたことを例証する結果といえよう。本来的に青年期は、社会によって与えられた既成の枠組みの中で行動することに飽きたらず、大人文化に抵抗する時代（藤野，1996）であるといわれる。その意味では、第2因子として抽出された“逸脱した対人関係”は、まさに青年期的な抵抗を経験しながら自立していく発達過程に存在する本来的姿であるはずである。しかしながら日本文化は、青年に早い段階で個別化の終了と社会的な調和を要請する（梶田，1988）特異性をもつ。伊藤（1995）の表現を用いれば個人志向性が軽視され社会志向性が尊重される文化であり、また独立主体としての個の意識の弱さ（高田他，1987）と相互依存的自己理解を典型とする文化である。それも集団への準拠を大人社会に要求して、それは学校場面で校則への遵守の圧力というかたちで影響力を強め、同年代の若者のファッションやブーム、娯楽などの文化はサブ・カルチャーとして軽視されて

しまうと思われる。しかし、むしろ第2因子の“逸脱した対人関係”の傾向がある生徒は、同年齢の仲間との社会性は損なわれていないことから、社会性発達の観点からは評価される面をもつと考えられるのである。

第3および第5因子として抽出された“活動性の低下”と“主観的苦痛”の因子は、ともに自我収縮的な行動に一括されうるが、後者が内的な心理状態を、前者がその表出を指す相補的な関係性をもっているようにみえる。教師がこれらのいわゆる目立たない生徒の状態に不健康性を見出していることは、教師の生徒を観察する専門性が発揮されていることを示し、さらにこの2つが教師には生徒の一つの状態像の中に観察されていないことも指している。教師は、活動水準が低下した生徒がかならずしも意識的に苦痛を感じているのではないこと、意識的な苦痛が強い生徒が必ずしも漫然と生活していないことを理解できる眼を有している。これら両因子に対する不健康性認知が第1因子よりも高い点からも、教師が生徒の内面性を理解しようとする姿勢を有していることがうかがえよう。そしてこれら“良好な対人関係の欠如”と“活動性の低下”への注目において女性教師の得点が高いことは、生徒の内面へのアプローチの姿勢は女性教師の方が豊かであることを示唆している。

第4因子の“期待への同一化過剰”は、他の4因子が互いに相関関係を持っていた(TABLE 3)のに対して、かなり独立である点で特徴的である。この因子は項目内容からも明らかなように、学業を中心とした大人の期待が生徒の個人内の目標へと内在化されていることに関係しており、適切な程度であれば一般的にはむしろ健康的に認知される傾向があるだろう。しかしこれらの項目が“体調が悪くて学校を休むことが多い”の項目と結びついて認知される点に注目すべきである。大人の期待への同一化心性が過剰になり、それが観念と行動の強迫性をもたらし、その結果息切れを経験して学校場面への不適應の徴

候を示す関連性を有する。このような理解において教師は不健康を認知し、この一連のメカニズムは優等生の息切れ型(小泉, 1973)の不登校像に合致しているといえよう。表面的には社会的に望まれるまじめで勤勉な特徴をもつ生徒の中に、息切れ型不登校との関連づけで問題性を感じ得できるという、教師の専門的認識眼がここにも示されているのではないだろうか。

これらすべての因子における認知された不健康性の程度は、その因子の出現度の認知と有意な負の相関を持っていた。これは、頻度として一般的でない生徒の状態に対して教師が一層不健康だと感じていることを意味しており、換言すれば、教師自身が日常経験的に接している生徒に対する問題性の意識は低くなっていると言えるかもしれない。ただし、教師がそのような生徒とかかわっていくと慣れが生じて、不健康性の意識が鈍っていくといった影響関係は、本結果からは明らかにならない。

以上、教師による生徒の不健康性の認知について、因子構造の検討からいくつかの特徴が明らかにされた。“逸脱した対人関係”の因子を不健康性というネガティブな評価で捉える意味において、日本文化に内在する社会一般的な視点が教師に強いことがうかがえた。しかしその他のいくつかの因子構造の特徴からは、生徒の意識や行動の背景に着目する教師の専門家としての認知基準を備えていることを示すことができたであろう。このことは、教師の中にカウンセリング・マインドをもって生徒に接する必要性の認識が浸透してきている表れであるかもしれない。しかし教師の認知の特殊性を明確に示すために、認知構造の差異を他群との比較において実証していく課題が残されている。そして、生徒行動の構造分析から導き出される不健康行動の因子と肯定的自己意識などの健康性指標との関連を検討し、そこから明らかにされた生徒行動の客観的健康性との異同を明らかにしていく必要がある。スクール・カウンセラーの需要が

高いが供給が乏しい現状において、教師がカウンセラーの役割を果たしていけるようにする必要性が高まっている。伊藤(1994)が整理した早期発見と予防、多面的活動、協力と連携などの、教師がカウンセリング活動を行った場合の利点をさらに促進し、教師の教える立場とカウンセリングにおける態度の間の大きな相異という困難を縮小していくためにも、教師の不健康性認識を一層精緻な水準へ高めていく材料を提供していく必要性は高いであろう。教師の生徒認知を問題にしていく意義は、それが生徒の教師認知や対教師行動に影響する従属変数となり、さらにこの従属変数が教師活動にも影響を与えていく独立変数にもなりうるとする、教師生徒間相互作用あるいは両者の円環的影響関係の研究に発展させていくことで一層高まるであろう。

引用文献

- Ausubel, D. P. 1954 *Theory and problems of adolescent*. New York: Grune & Stratton.
- ベッカー, H.S. 村上直之(訳) *アウトサイダーズ* 新泉社
(Becker, H.S. 1963 *Outsiders*. The Free Press.)
- Brown J.M., & Armstrong, R. 1982 The structure of pupils' worries during transition from junior to secondary school. *British Educational Research Journal*, 8, 123-131.
- Elias, M.J., Gara, M., & Ubriaco, M. 1985 Sources of stress and support in children's transition to middle school: An empirical analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, 14, 112-118.
- エリクソン E.H. 小此木啓吾(訳編) 1973 *自我同一性——アイデンティティとライフサイクル——* 誠信書房
(Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International University Press.)
- 藤野京子 1996 非行少年のストレスについて *教育心理学研究*, 44, 278-286.
- Galloway, D. 1985 *School and persistent absentees*. Oxford: Pergamon Press.
- 浜名外喜男・天根哲治・木山博文 1983 教師の勢力資源とその影響に関する教師と児童の認知 *教育心理学研究*, 31, 35-42.
- 長谷川博一 1990 青年期男女にみられる問題行動傾向の構造 *東海女子大学紀要*, 9, 75-85.
- 長谷川博一 未公刊 青年期における日常的問題傾向の構造について(資料)
- 伊藤美奈子 1994 学校カウンセリングに関する探索的研究——教師とカウンセラーの役割兼務と連携をめぐる—— *教育心理学研究*, 42, 298-305.
- 伊藤美奈子 1994 理想化の分化と内面化に見る非行少年の心理的特徴 *教育心理学研究*, 42, 363-372.
- 伊藤美奈子 1995 孤独感類型の変化から見た個人志向性・社会志向性の発達過程 *心理学研究*, 66, 10-15.
- Jackson, P., Silberman, M., & Wolfson, B. 1969 Signs of personal involvement in teachers' descriptions of their students. *Journal of Educational Psychology*, 60, 22-27.
- 梶田毅一 1988 *自己意識の心理学* 第2版 東京大学出版会
- 小泉英二 1973 登校拒否とは何か 小泉英二(編) *登校拒否——その心理と治療——* 学事出版 Pp.14-19.
- 小泉令三 1992 中学進学時における生徒の適応過程 *教育心理学研究*, 40, 348-358.
- Lerner, R.M. 1985 Adolescent maturational changes and psychosocial development: A dynamic interactional perspective. *Journal of Youth and Adolescence*, 14, 355-372.
- レヴィン K. 猪股佐登留(訳) 1956 *社会科学における場理論* 誠信書房
(Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. New York: Harper.)
- 三浦正江・坂野雄二 1996 中学生における心理的ストレスの継時的変化 *教育心理学研究*, 44, 368-378.
- 小川一夫 1955 児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究(第一報告) *島根大学論集*, 5, 1-19.
- 小川一夫 1957 児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究(第二報告) *島根大学論集*, 6, 1-14.
- 小川一夫 1957 児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究(第三報告) *島根大学論集*, 7, 34-42.
- 岡安孝宏・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美

- 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- 岡安孝宏・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-312.
- ポープ A.W.・ミッキヘイルS.M.・クレイグヘッド W.E. 高山巖 (監訳) 自尊心の発達と認知行動療法 岩崎学術出版社
(Pope,A.W., McHale, S.M.,& Craighead,W.E. 1988 Self-esteem enhancement with children and adolescents. New York: Pergamon.)
- ロジャーズ C.R. 小野修 (訳) 1966 問題児の治療 堀淑昭(編) ロジャーズ全集1 岩崎学術出版社
- 坂西友秀 1994 教師の利己的生徒, 利他的生徒についての認知と生徒の自己認知 教育心理学研究, **42**, 403-414.
- 清水将之 1985 学校社会と思春期問題 作田勉・猪股丈二 (編) 思春期対策 誠信書房 Pp.92-128.
- 白井利明 1992 東京拒否児に対する青年・大人・教師の認知の違い 教育心理学研究, **40**, 1-9.
- 高田利武 1987 自己意識の形成 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 (著) 自己形成の心理学 川島書店 Pp.9-67.
- 樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果 教育心理学研究, **40**, 130-137.
- Wapner,S., Kaplan,B.,& Cohen,S.B. 1973 An organismic-developmental perspective for understanding transaction of men in environment. *Environment and Behavior*, **5**, 255-289.
- 山中康裕 1982 問題児・問題行動論 山中康裕(編著) 問題行動 日本文化科学社 Pp.1-18.
- 吉田道雄・山下一郎 1987 児童・生徒の学習意欲に影響を及ぼす要因と現職教師の認知 教育心理学研究, **35**, 309-317.

要 約

本研究の目的は、教師の高校生徒の不健康性に対する認知の構造を明らかにすることであった。そして、生徒行動の不健康性と出現度の回答を主観で求める30項目の尺度を、108名の現役高校教師に対して施行した。

因子分析の結果5つの因子が抽出され、(1)良好な対人関係の欠如、(2)逸脱した対人関係、(3)活動水準の低下、(4)期待への同一化過剰、(5)主観的苦痛と命名された。教師はこれらの枠組みにおいて不健康性を認知していると考えられた。教師の認知枠の特徴として以下のような点が考察された。教師は、対人関係の欠如を他者への対抗と同じ因子中に見出しており、活動の低下と主観的苦痛を別因子で捉え、生徒の内面状態に注目を払い、特にそれは女性教師に顕著で、過剰な同一化を学校不適応との関連におけるようにネガティブに捉えていた。そして、不健康性の認知と出現度の認知は負の相関関係にあった。

これら枠組みの特質を実証するために、教師と一般成人の比較を行っていくことが必要である。

Abstract

TEACHERS' PERCEPTION OF UNHEALTHINESS IN BEHAVIORS OF HIGH SCHOOL STUDENTS

The purpose of this study was to clarify the structure of teachers' perception toward unhealthiness among high school students. A 30 items scale asking unhealthiness and frequency of students' behaviors by teachers' subject was administered to 108 high school teachers on active service.

Factor analysis extracted 5 factors named (1)lack of general interpersonal relations, (2) deviation from the standard interpersonal relations, (3)decline in the active level, (4) over-identification with expectation, and (5)subjective pain, and showed that teachers perceived students' unhealthiness in these frame. The characteristic concerned with the way of teachers' frames were as follows: teachers perceived lack of interpersonal relations and counter relations in the same factor, distinguished activeless from subjective pain, paid more attention to students' internal states and this was remarkable in the female teachers, perceived over-identification negatively such as in the course of school maladjustment. And the perception of unhealthiness and frequency were in the relation of negative correlation.

It is required to prove differences of these frames by the comparison between teachers and general adults.

key words:

teachers' perception,
unhealthiness in behavior,
high school student,
structure of perception,
factor analysis